

英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 60 No. 3 2008

主幹 佐野 正之

巻頭言

最近の韓国初等学校英語事情

鹿児島大学教授 ● 樋口 晶彦

韓国の初等学校英語教育は新たな段階へ入った。1997年の第7次教育課程以来、英語教育の早期化、内容の変化(writingの早期導入)、時間数、さらに公教育としての英語教育の非効率性などまでも議論されるようになった。こうした現状から判断するに、韓国の英語教育は新たな段階へ入ったと考えられる。初等学校英語教育を取り巻く現状を要約すると、その主なものは以下のようになりそうだ。

(1)塾の増加：韓国の多くの親は、時間数、内容、開始年齢などにおいて現在の早期英語教育には不満足で、その結果、塾通いが増加し社会問題となった。この対応策の一つとして、教育人的資源部は、既に全国50の研究開発校において開始年齢の早期化を検討している。(2)EPIK(English Program In Korea)の設立：教育人的資源部は、初等学校英語教育改革の特別チーム(EPIK)を編成して、カリキュラム、教師の英語能力のチェック、教科書、教員採用試験だけでなく、外国人教員計画までも幅広く統括して、取り組んでいる。(3)English Village, English Cityなどの設立：これら英語社会での生活を通して英語の運用能力を高めていくプログラムがソウル、パジュ(京畿道)、済州島、仁川などにおいて始まっている。これらの運営には多額の地方財源が導入されているが、民間への売却が検討されるほど経営危機に瀕しているところも少なくなさそうである。(4)授業時間数の増加の可能性：新大統領、李明博氏によると初等学校3年の英語授業時間数を現行の週1時間から3時間へ増やすという可能性も出てきた。(5)テストビジネスの台頭：PELT(Primary School English Language Test)のような民間の言語テストが出てきた。

このように、韓国の早期英語教育はこれまでとは異なった新たな段階に入ったと考えられる。留意すべきは、韓国はあくまでも技能習得を目指す「英語教育論」中心の考え方であり、英語を通して子どもの学びの充実や可能性を探るという「小学校教育論」として捉えられてはいないことである。この辺りは今後、日本の小学校外国語活動や英語教育を議論していく中において、韓国の英語教育を過大評価する前に十分注意しておく必要があるとみられる。



新『学習指導要領』の趣旨と その生かし方

東京国際大学教授 新里 眞男



1. はじめに

学習指導要領が改訂された。その趣旨に沿って教科書が編集され、その教科書を使うことにより、授業内容が改善されることが期待されている。その意味では、大きな変化を生む可能性のある改訂であるが、やはり重要なのは、実際に授業を行う英語教師が、改訂の内容を十分に理解し、その趣旨を生かそうとすることである。そうでないと、期待された改善も図れないことになる。

ここでは、今回の改訂の趣旨を大まかに理解し、それをどのように授業に生かしていくかを考えることにする。

2. 改訂の特徴

今回の改訂の特徴として次の4点が挙げられる。

- (1) 小学校での「外国語活動」が前提。
- (2) 4技能の総合的な育成を目指す。
- (3) 言語材料の定着を重視している。
- (4) コミュニケーション活動の例を加えた。

これらについて一つずつ見ていくことにする。

3. 小学校の「外国語活動」との連携

今回の改訂の大きな変化の一つに、小学校での「外国語活動」(実質的には「英語活動」となる)の必修化がある。高学年の5・6年次に、週あたり1時間、年間35時間の授業が行われる。そこでは、外国語を聞いたり、話したりして、コミュニケーションを図ることの楽しさを体験することや、コミュニケーションを図ることの大切さを知ることなどが指導され、それを通して、外国語によるコミュニケーション能力の「素地」を養うことが目標とされている。

果たして、ここでいう「コミュニケーション能力の素地」とはどんなものだろうか。積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度のことだろうか。それとも、簡単な挨拶や自己紹介などがで

きる能力のことだろうか。いずれにしろ、従来中学校の入門期と言え、生徒の英語力が全く白紙であることを前提として授業をしていたが、それを180度転換しなくてはならないのである。

今後は多くの生徒が、特に聞くこと、話すことに慣れた状態で中学校に入学してくると期待したいが、中には、英語が既に嫌いになっている生徒もいるかもしれないし、既に英語の学力差も生じているかもしれない。さらには、発音や文法・文型について間違った知識や技能を身に付けていたり、果ては、間違った英語観や英語学習法を身に付けてしまった生徒もいる可能性がある。これからは、これらを前提に中学校入門期の授業を考えなくてはいけないのである。

今回の改訂では、「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されていることを踏まえ」て中学校での指導が行われるべきであるとされた。本当にそのような素地の育成が期待できるのか不安である。入学当初にアンケート調査や英語力調査などを行い、生徒の実態を把握した上で、適切な指導をすべきである。中学校での授業数が週あたり3時間から4時間に増えて単純に喜んではいられない。Remedial studyをさせるのに、増加時間分のかなりの時間を要するかもしれない。

まして、小学校で様々な外国語活動を行ってきた生徒に、そのくり返しのような授業をして彼らを退屈させることは許されない。彼らが既に身に付けた能力や態度を生かしながら、中学生らしいチャレンジングな活動を用意する必要がある。今まで以上に中学校教師の創意工夫が求められる。

4. 4技能の総合的な育成

現行の学習指導要領では「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養

う」とあるところを、改訂では、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと(下線筆者)などのコミュニケーション能力の基礎を養う」となった。現行の学習指導要領で音声に関わる2技能を重視したのは、学習内容の3割減を目指した当時、言語材料を3割も削減しては「英語」ではなくなると考え、それならば、4技能のバランスは犠牲にしても、聞くことと話すことを重視するしかないと考えたからだ。それが今回、小学校「外国語活動」が必修とされ、中学校で週あたり1時間増えて4時間の授業時間が確保されたとなれば、従前のように4技能の総合的な育成を目指すのは当然である(4時間に増えたことについては文科省当局の大きな覚悟が見て取れるが…)。

ただ、「4技能の総合的な育成」という概念は一見簡単なようだが、実際にどのように指導するかとなると難しい。言語活動の項目として掲げられた「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」とか「話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること」などには複数の技能を総合的に扱おうとする姿勢はやや読み取れるが、果たしてそれで4技能の総合的な育成につながるのか明確ではない。今後文科省が公表する『解説』で具体的な言語活動例が示されることを期待する。

5. 言語材料の定着の重視

文科省は学力低下問題に大いに悩まされた。その一つの答えが今回の学習指導要領である。外国語(英語)の改訂もその流れの中にあると見る。

「学習段階を考慮した指導上の配慮事項」の項目の中に「第1(2)学年における学習内容を繰り返して指導し定着を図るとともに」という文言がある。「繰り返し」という表現には、「機械的な反復練習」という意味合いもあって、私などは極力避けてきたが、今改訂では堂々と使われている。「基礎・基本」をしっかりと定着させようという発想だろう。また、文法指導に関して「関連のある文法事項はまとまりをもって整理する」という記述があったり、「日本語との違いに留意して」という表現があ

るのも、見方によっては、従来の「和訳を通して英語についての知識を身に付ける」ことを主張しているように解釈できてしまう。言葉を用いるようになるには、反復を含めた練習活動は大切である。しかし、やはり何のための練習かということ念頭に置いておく必要がある。発音や文法・文型を「反復練習」して定着させることは、あくまでも4技能を総合的に活用する実践的コミュニケーション能力を育成するための効果的な指導の一環として捉えるべきだろう。

6. コミュニケーション活動の例の追加

言語活動例は、従来通り、4技能ごとに示されているが、それぞれ1項目ずつ増えている。先に引用した話すこと、読むことの言語活動以外には、次のものが挙げられている。

- ・まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること
- ・身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。

これらは、中教審答申での「重点指導項目」にあたるものであり、従来のものよりはるかに具体的なコミュニケーション活動となっている。おそらく、文科省が実施した教育課程実施状況調査の問題として実際に使われた言語活動に近似するものだろう。つまり、中学校の卒業時にはこの辺まで熟達してほしいという到達目標を示したものと考えられる。将来、生徒指導要録が作成されるときには、これらの言語活動例がそのまま評価活動に応用されるだろう。Can-doリストの一部として具体的な指導目標を掲げたものと評価できる。

7. 最後に

その他、「発音と綴りとを関連付けて指導すること」となっているところは、「発音と綴りと意味」としてほしかったこと、辞書指導について「必要に応じて」が消えて、単に「活用できるようにすること」になったことの意味を知りたいことなどがあるが、次の機会にしたい。全体的には、前向きな改訂であると評価できる。



小学校における外国語活動を踏まえた コミュニケーション活動の方向

筑波大学大学院人文社会科学研究所准教授 卯城 祐司



新学習指導要領から、コミュニケーションの頭にあった「実践的」という言葉が取れたことについて深読みをする向きもあるが、もともと「コミュニケーション」と「実践的コミュニケーション」という二つの定義を厳密に区別することは困難であったので、このこと自体、さほど大きな意味を持たないようである。目標に「読むこと」と「書くこと」が加えられ、「特に聞くこと及び話すことの言語活動に重点をおいて指導する」という項目が削除された点についても、コミュニケーションが特に特定の技能にこだわったことではないことを考えると妥当であろう。

新学習指導要領からは様々な示唆が得られるものの、ここでは小学校における外国語活動を踏まえ、中学校における英語のコミュニケーション活動が、どのように変わっていくのか考えてみたい。

コミュニケーション能力の「素地」とは？

小学校の外国語活動の目標には、「中学校における外国語教育とあいまって、外国語教育を充実」させるための、「コミュニケーション能力の素地の育成」が掲げられている。直接的な「接続」が求められる中学校1学年はもちろんのこと、2、3学年の指導にあたって、この「素地」を受けたコミュニケーション活動の設定が求められる。具体的には、踏まえるべきコミュニケーション能力の「素地」とは、次の3点と考えられる。

第一に、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めること。」第二に、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること。」そして最後に、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること」である。

よりわかりやすい言葉に置き換えると、「興味・関心」、「態度」、そして「(音声や基本的な表現への)慣れ親しみ」である。

小学校の外国語活動については、「中学校英語

の前倒しでない」、「必要以上のくり返し練習を避ける」など、いわゆる「スキル型」ではないため、中学校の英語担当者からは、これまでその曖昧性に対する批判も多く、どちらかと言うと、「小学校での外国語活動を受けた中学校英語のあり方」を考えるよりは、「(小学校で習ったことは全て忘れて)もう一度、基礎からやり直す」というスタンスがとられることも多かったようである。

しかしながら、この「体験型」の活動を客観的に評価し、そしてその意義を理解することによって初めて、中学校英語が深まっていくと考える。

「体験型」活動の成果

小学校で行われている外国語活動の実態には大きなばらつきがあるものの、追跡すると、中学校2年生頃には差が消滅するとか、面接によって、小学校での英語の経験を言い当てようと実証研究しても不可能であったとの報告をよく目にする。

しかし、これは中学校英語が小学校での活動と接続がないことの裏返しであり、また、小学校での経験が「スキル面など、必ず目に見えるものになるはずである、そうでなければ成果と呼べない」との先入観があるためであろう。では、中学校英語が踏まえるべき、小学校での体験型活動の特徴にはどのようなものがあるだろうか。

一つは、体験の蓄積である。たとえば、ある小学校の教室で、オーストラリアや日本の有名な場所について、お互いの情報を伝え合って交流し、地図の完成を目指した活動が行われていた。いわゆる「インフォメーションギャップゲーム」と呼ばれているこの種の活動は、ルールが複雑で難しいことがあるが、子どもたちの理解が早く、「あ、In my room ～. でやったところだね」との声がすぐに上がった。in, on, under, next to などの表現を使った教室での場所あて活動の経験が、異なる活動でも生きたのである。道案内にしる、買い物に

しろ、小学校でどのような活動が行われているのか、中学校の先生方が理解することにより、子どもたちは体験した内容を思い出し、スムーズに活動に入ることができるであろう。

第二に、このような成功体験を経た子どもたちは、簡単にあきらめたりしないようである。中学校での英語指導経験のある小学校の先生方は、口を揃えて、「中学生は、自信がない表現となると、話す場合も書く場合も最初からあきらめてしまうけれど、小学生は、I like ～. と話しながら考えて、つなげようとしている」と、その違いを語っている。このような子どもたちは、ゆっくりとくり返したり、ジェスチャーや、時には日本語を用いたりして、どんな場面でもあきらめずに、相手に自分のことを伝えようとする。

そして、第三に、耳に触れた語彙の蓄積が挙げられよう。新学習指導要領では、語彙数が900語から1,200語程度まで引き上げられた。小学校の活動で慣れ親しむ語彙も考慮されてのことであろう。しかしながら、語彙知識には「広さと深さ」がある。単なる語彙サイズで計るのが「広さ」であるが、1語1語について、どのように知っているのかが「深さ」である。たとえば、小学校段階で何度も出てきた語彙であっても、耳や口で覚えた語彙知識と、文字で覚えたり書いたりした語彙知識は異なるであろう。一方で、体験活動という場面を通して得た語彙知識には、いわゆる「宣言的知識」ではない「手続き的知識」としての深まりと広がりがあるだろう。つまり、単なる「英語→日本語」の訳語的な知識ではなく、applesという語彙知識には、「買い物」、「食事」などの場面や、bananas, orangesなど他のフルーツとのつながりがあるだろう。

小・中接続の留意点

小学校の外国語(英語)活動の成果に対しては、特にスキル面に過度の期待を抱くことは慎まなければならないが、再認識すべき財産も多い。そして、同じ「英語」を扱ってはいるが、その違いも踏まえる必要がある。

外国語活動を経て中学校に入学してくる子ども

たちは、最初の授業から、教室の前に出てきて、2人でサッと活動などもできるであろう。しかし、だからといって、中学校1学年の英語を、たとえばいきなり現在の2学期レベルから始めることには慎重であるべきである。小学校で経験した活動に、さらに深まりを持たせるスパイラルな形で、外国語活動の体験を踏まえていくべきである。

小学校では、子どもたちのことを一番よく知っている学級担任が英語を用いたコミュニケーションの場面を設定している。子どもたちが知っているようなこと、できそうなこと、伝えたいことなどをベースに場面を設定して初めて成就体験が得られるのであって、同じ活動だとしても、どのような場面でもうまくいくわけではない。このことは、外国語活動を通して付随的に獲得された英語の「狭さ」と、中・高・大の英語が、これまでなかなかうまくいかなかったことも多いコミュニケーション活動を成功させる要因としての示唆を含んでいる。

また、音声面からの導入を目指す小学校の外国語活動を受けて、中学校では今以上に、文字の導入は慎重に、細やかな配慮を持って行わなければならない。

中学校英語の「ワクワク感」を求めて

これまでの中学校英語は、「初めて英語に触れる」という子どもたちの喜びが大きな原動力となっていた。これからは、それが既に小学校で経験済みとなり、さらに、子どもたちは外国語活動の様々な体験で「英語を使うワクワク感」を満喫してくる。私たちは中・高・大で、どのような「ワクワク感」を与えることができるだろうか。これまで、英語の知識を定着させようとするあまり、基礎・基本の活動にとどまり、子どもたちに挫折感を与えることが多くなかったであろうか。小学校での外国語活動のように、英語を使う経験を与え、英語と向き合う姿勢を伝えていたであろうか。外国語活動を踏まえ、中学校ならではの「英語を使う喜び」、そして「英語が使えるワクワク感」を子どもたちと共有したいものである。

中1 段階的な活動でやる気を

宮城県仙台市立富沢中学校教諭 高橋 一誠



1. はじめに

期待と不安を胸に学習を進めてきた1年生も、夏休み後になると、約4か月学習したことを忘れてしまいがちである。とりわけスピーキングの能力については、普段英語を話す機会が少ないため、大きな差が見られる。

しかし、生徒たちは自分の思いや考えを、間違いを気にすることなく表現し合う活動には非常に積極的に取り組み、そこに英語学習の楽しさを見出している。また、2学期制をとっている仙台市では、夏休み後は学期末にあたり、今まで学習したことを総括する時期である。

そこで、夏休み後にALTとのスピーキングテストを企画することにした。そしてその日までの授業の指導過程を工夫して、それぞれの段階で文型の定着や、表現力の向上を図ることにより、生徒にやる気を引き出す取り組みを日々実践している。

2. スピーキングテスト実施の連絡

まず、数週間前にスピーキングテストを実施する連絡を行う。ALTとの会話では、よく受動的になりがちであるが、ここでは生徒が会話をリードしていかなければならないことを伝える。それにより、生徒に今後、より一層意欲的に活動に取り組んでいかなければならない気持ちを持たせる。

3. 文法の定着はゲームを利用する

学習した文法事項をしっかりと定着させるために、毎授業の始めに導入としてゲームを行っている。ゲームはその授業に対する意欲付けになると同時に、文法事項の定着を図ることができるという効果がある。そこで以下のゲームを実施した。

活動名: Crisscross(一誠版)

- ①全員起立する。
- ②教師はカードを提示し、生徒は手を挙げてそこに書かれている日本語を口頭で英訳、疑問文、否定文に言い換えて答える。解答権は基本的に1人1回。

例: 問題→ 私は朝食にご飯を食べます。

解答→ I have rice for breakfast.

Do you have rice for breakfast?

I don't have rice for breakfast.

- ③解答できたら、座席の縦の列か横の列かを指定し、該当列の生徒は着席する。答えることができなかつたら1回休み。
- ④起立している生徒の中で解答できなかった生徒がいる場合は、着席している生徒の中でまだ解答していない生徒が答えなければならない。答えることができなかつたり、間違ったりしたら全員起立。

この活動を通して、毎時間学習した文法事項を振り返ることができ、さらにそれらを使って疑問文、否定文に言い換える練習もすることができる。また、ゲームは習熟度が高い生徒に頼ってしまう傾向があるが、上記のルールで行うと、着席した生徒も気を抜くことができず、全員に解答しなければならない責任が出てくるため、非常に盛り上がる。

4. 会話練習はやりとりの内容を工夫する

文法事項を学習するたびに、会話例に従って発話する練習を実施した。ここでのポイントは、次の6つ。

- ①学習した文法事項が日常の中で使われるような自然な会話例にする。
- ②必ず相手とのやりとりを通して何か情報を得られるようにする。
- ③相手が聞いたことに答えるだけでなく、反応を示したり、コメントを付けたりといった普通の会話の中で見られるようなやりとりを入れる。
- ④同じ会話を、相手を変えて何回かくり返し、できるようにする。
- ⑤Crisscrossで使った文、またはそれに近い文をできるだけ多く取り入れる。
- ⑥同じ活動を、日にちを変えて3回ほど実施する。3回目は会話例を示さないで実施する。

例: be動詞の練習

A: What's your favorite ()?

B: I like ().

It's (). How about you?

A: I like ().

It's ().

一見普通のインフォメーションギャップの活動に見えるが、上記の6点に注意して活動を実施することにより、学習した文法事項が会話の中でどのように使われるのかを理解することができる。

5. 今までの練習が活かされるTASK活動を実施

例に従って会話練習をするだけでは、実践的なコミュニケーション能力は身に付かない。そこで、いくつかの文法事項を学習した後に、TASK活動を実施する。高島(2005)によると、TASK活動の条件は以下のようになっている。

- ①意味・内容の伝達が中心である。
- ②言語を用いて与えられた活動目標を達成することが第一義である。
- ③意味のやりとりができる。
- ④二つ以上の構造の比較がある。
- ⑤話し手と聞き手に情報(量)の差がある。
- ⑥活動や得られる情報が興味深いものである。

しかし、1年生の場合、使える文法事項が限られているため、一つひとつの条件を満たすことが難しい。そこで、たとえば「新学期のある昼休み、お互いのことをもっと知り合って友だちになろう」といった簡単な場面設定をする。生徒たちは学習した文法事項をいつどのように活用してやりとりを行うかを自分たちで臨機応変に判断して取り組む、といったことに重点を置いて実施する。ここで注意したいのは、前の練習で取り入れた会話例が活用できるような場面を設定することである。そうすることにより、取り組みやすくなると同時に、一つひとつの活動に関連性が出てくる。

しかし「話す」活動は、「書く」活動と違って記録に残らず、振り返り活動がしにくい、といった難点がある。何がうまくいってどこができなかったのかを確認することができなければ、限られた時間の中で効果的に上達させるのは難しい。そこで活動時は、テープレコーダーを活用して会話を記録する。TASK活動後に自分たちの会話を聞き、それを紙面に書き起こして読むといった振り返り

活動を実施する。そうすることで、「話す」「聞く」「書く」「読む」の4技能を活用し、総合的に英語の力を伸ばすことができると考える。

6. いよいよスピーキングテスト

仙台市では各校に1人ALTが配置され、生徒たちは1対1で会話をする機会に恵まれている。しかし、本校は1学年300名近い生徒が在籍しているため、スピーキングテストを1対1で実施し、1時間で終了させるのは難しい。そこで、周辺の中学校に在籍しているALTに協力してもらうことにしている。実施の手順は以下の通りである。

- ①4人程度のALTが廊下に立つ。
- ②生徒は一人ひとり教室から廊下に出てALTと生徒主導の自由な会話を3分程度行う。
- ③ALTはその会話から、意欲、表現の能力を評価し、一人ひとりにコメントを付ける。
- ④会話を終えた生徒は教室に戻り、全員の生徒が終了するまでプリント学習を行う。

ALTとの自由な会話といっても何を話してよいかわからなくなる場合が多い。しかし、TASK活動までの段階を踏んだ活動を実施すると、ある程度の見通しがつき、学習してきた成果を十分に発揮しようと努力する。

また、ALTはビデオで生徒との会話を録画し、教師が後で確認することで、ALTが付けた評価の妥当性を確認するようにした。生徒はALTからのコメントが書かれている評価をとっても楽しみにしている。

7. 最後に

生徒たちは基本的に英語を話す活動に生き生きと取り組み、そこに英語学習の楽しさを見出している。特に1年生はそういった傾向が強い。夏休み後、しばらく英語から遠ざかっていた生徒たちにとって、その特徴と、学期末という状況をぜひ生かしたい。

この一連の活動は、夏休み後のよい頭の切り替えになると同時に、今まで学習した文法事項を楽しみながら、かつ緊張感を持って取り組むことができ、さらに自信につながる活動であると考えられる。

■参考文献

高島英幸(2000)『英語のタスク活動と文法指導』大修館書店
高島英幸(2005)『英語のタスク活動とタスク』大修館書店

中2 語彙力Upでやる気Up!

岡山県岡山市立西大寺中学校教諭 竹島 潤



1. はじめに

本校では、1年生で少人数授業を実施し、2年生では一斉授業をしている。このため、担当教員が大幅に変わったり、一斉授業への戸惑いがあったりする。故に、中2の授業では生徒が意欲的に授業に取り組めるようにするために、様々な工夫が必要とされる。

当初は授業規律の捉え方が甘い生徒が多く、それを改善しながらのスタートであった。授業内で「おもしろそう」「できそう」と思える活動を増やしていくと、授業規律の改善にもつながる。大多数の生徒にとって、意欲が衰える原因は「単語が覚えられない・書けない」ことであったので、「授業内で単語学習に取り組める」工夫を通して、生徒のやる気を引き出せるよう努めている(「自力で何とか覚えていくべし」との気持ちもあるのだが)。

特に、夏休み明けは既習語彙の定着が不十分だと、わからなくなり、自信喪失、意欲減退…と悪循環になりがちだ。授業での語彙指導は意欲の底上げにつながると考えている。

2. 語彙指導の前に

①「特に大事な」語を明示する

英語が苦手な生徒にとっては、教科書に出てくる全ての単語を覚えるのは、とてつもなく大きな課題である。「これだけは」というように重点的に指導すると頑張ることができる。フラッシュカードに赤丸を付ける、語彙活動のシートで何度も使う、単語テストに必ず出すなど重要語彙(都英研の推奨発表語彙リスト参照)を意識付けさせることが大切だ。

②理論的な裏付けを大切に

有益な理論は授業に反映させたい。

(ア)分散効果:単語・文の学習では、集中して学習する場合に比べて、分散させた方が記

憶に残りやすい。授業内、授業-授業間での分散効果をねらって、活動や授業の流れを工夫している。

(イ)意味を考えたり、異なる文脈で読んだり、推測したりなどの「深い」処理は記憶を促進する。

(ウ)音読を通した、語彙チャンクの蓄積と文法規則の自動化(土屋, 2004)。

③授業内で語彙を意識させる

【Warm-Up】

語彙のゲームやペア学習を行う。

【導入】

絵や写真を伴って新出語彙を導入する。

【Teacher Talk】

重要語彙を意識的に使う。

【音読】

レベル付きのシートで音読練習する。「カナ付き」「()付き」「冒頭残し」など。

【終末】

重要語彙1~2個のスプリングを空中に指で書いたり、フラッシュカードで確認してから、授業を終える。授業内での分散効果である。

3. 実践例

①Words & Sentences Sheetを用いたのペア学習

teacher役とstudent役のペアで2分間ほどの制限時間を設けて、セクションに出てくる重要語彙を学習し合う。student役がteacher役の出題に答えられた場合は、□にチェックを入れていく。同じシートを3回くり返し、1授業で1回、「日本語→英語」、「日本語→単語のつづり」など出題方法に変化を持たせる。文脈を意識させるために、例文や教科書本文と重複する文も載せている。習熟度の低い生徒もペア相手に聞いたり教わったりでき、いつもより積極的に取り組む。

Words & Sentences Sheet
2-() No() NAME()

p.58 Program 7-3 書いて・読めて・覚えるようにするぞ!

WORDS 単語を覚える!

1. feel	□□□	感じる、手触りで分かる
2. felt	□□□	feelの過去形
3. real	□□□	本当の
4. grow	□□□	育つ、成長する
5. if	□□□	もし~ならば
6. said	□□□	sayの過去形
7. share A with B	□□□	AをBと共有する

SENTENCE まとまり(文章)で単語を覚える!

- I feel good when I take a shower. □□□ 私はシャワーを浴びると、気持ちよく感じる。
- I felt the heat on it. □□□ 私はその上に熱を感じた。
- It was a real treasure. □□□ それは本当の宝でした。
- Money doesn't grow on trees. □□□
【ことわざ】金のなる木はない(お金を楽に得る方法はない)。
- If you ask him, he will help you too. □□□
もしあなたが彼に頼んだら、彼もあなたを手伝ってくれるでしょう。
- I said, "Do your best!". □□□ 私は「ベストを尽くせ!」と言った。
- You can share your dream with your friends. □□□
(あなたは) 夢を友達と共有することができます。

②Odd One Out

数個の単語から、ある根拠で異なる一つの単語を見つける。品詞、文字数、発音、語の連結など、基準が発見できればいずれも正解とする。Warm-Upとして行う。

Odd One Out [1]

(例) Yuki Andy Ken I → (答え) I 以外は人名だから。

- am are is not
- high school home junior high school elementary school
- ian't I'm You're It's
- this that Thursday Tuesday

③単語の定義あて

教科書本文に出てきた単語について、英語の説明文と組み合わせる。単語の定義は『ロングマン基本英英辞典』(桐原書店)を参照している。生徒は英英辞典の記述に慣れていないので、選択問題形式にして取り組みやすくしている。

④Word Cross

アルファベットを網羅した表から、学習した語彙を見つける活動である。楽しみながら単語の認知速度を上げる活動である。

WORD - CROSS (P.62-P.82)

E	N	Z	Q	D	W	U	I	R	B
G	R	C	A	E	R	A	A	I	E
M	U	S	I	C	I	B	N	C	T
L	T	F	K	I	G	O	T	H	W
C	W	H	S	D	H	A	H	S	E
O	E	C	R	E	T	T	M	L	E
R	S	V	F	O	R	E	I	G	N
N	X	Z	E	O	U	O	P	N	W
E	N	T	E	R	O	G	P	Q	D
R	V	B	L	E	E	T	H	V	M

【下の語を探し出そう!】
musician through foreign decide feel
boat ate corner turn right
enter left between foot rich

⑤カタカナ英語の指導

身の回りにある外来語を利用して、語彙を広げることがねらいである。飲食物、色、スポーツ、日用品、動植物、その他のカテゴリーで、各10語程度を学習する。特に、音声的にカタカナと近似していて、身近なものを扱う。

4. おわりに

生徒の意欲を高める工夫として、授業内での語彙指導に焦点をあてている。単語テストでは満点の生徒が確実に増えているし、「前よりも単語を覚えられるようになった」、「よく覚えられていいと思った」、「ペアで練習してよく頭に入った」といった生徒の声を聞くと、嬉しくなる。研修で得た知識やアイデアを生かして、語彙活動を改善していきたいと思う。

また、特に重要な語彙については参考文献にもあるように「発表語彙」にまで高めないといけない。ただ覚えるだけでなく、自己表現する際に活用できるレベルにまで高められる語彙指導の工夫をしていきたい。

生徒の意欲に負けぬよう、指導法の工夫に意欲的に取り組んでいかねば、と自らを鼓舞している。

■参考文献

- 土屋澄男(2004)『英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導』研究社
- 東京都中学校英語教育研究会研究部(2006)『語いと英語教育(29)』
- 門田修平・池村大一郎(編著)(2006)『英語語彙指導マニュアル』大修館書店

中3 毎日少しずつ継続しよう!

石川県金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校教諭 三田 耕平



1. はじめに

3年生の8月からは、生徒もそろそろ「入試」について本格的に考え始める時期ではないでしょうか。生徒が既習事項を効果的に復習していく方法について、本校での実践をもとに紹介したいと思います。

本校では、どの学年も毎授業の最初の時間を使って短い活動を1~3個取り入れています。授業の最初の5~15分を使うこととなります。同僚の実践も含めて紹介させていただきます。

2. まずは「言える」ことから

様々な表現を学んできた3年生ですが、授業では次々と新しい大切な表現を学んでいきます。以前に学んだ単語や表現は、使わないとすぐに忘れてしまいます。

そこで、毎回の授業の最初に短い暗唱テストをすることにしました。1~3年生の教科書やワークブックなどから選んだ重要表現を使った英文とそれに対応する日本語とを並べた表をつくり、右側に3~4回分のチェック欄を設けたワークシートを使います。隣の生徒とのペア活動です(例参照)。

英文は言えなければ、書くことはできません。この活動をする際に、ある表現を正確に言えるようにすることから始めました。覚える活動は、家庭学習とするか、活動の直前に1分ほど時間を与え、日本語だけを見て英語で言う練習をします。ジャンケンで順番を決め、活動を始めます。ペアの生徒は相手が何個、間違えずに言えたかを数え、チェックの印を付け、言えた文の数を記入します。3年生では、練習1分間、テスト1分間としています。

この活動を授業の最初に取り入れると、制限時間の中で、できるだけ速く、たくさん言おうと生徒は必死になりますし、生徒の英語を発する声で賑やかに授業を始めることができます。短時間で

すが、全員が毎回、集中してたくさんの英語を口にすることができます。

3年生なら、1分間で10~20文くらいを暗唱できるでしょうか。簡単すぎるようなら文を増やします。時間を増やすのもよいと思いますが、毎回の活動ですので、できるだけ短い活動にし、授業の他の活動に支障をきたすことがないようにしています。

活動の後、前回よりも多く言えていれば、ご褒美を与えています。毎回自分の目標を決めさせ、目標を達成できていればご褒美を与えるというのもよいと思います。生徒は各自世界地図を持っており、“I'll give you one flight ticket!”と言うと、地図を広げて次の都市に進み、旅行を楽しんでいます(現在、他の活動もご褒美は「航空券」にしており、ときどき“Where are you?”とか“Are you in Tokyo?”とか“Have you ever been to Spain?”などとたずねるようにしています)。

暗唱する文は、①できるだけ様々な表現を取り入れる ②電話での会話など場面別の表現特集 ③文法事項別の表現特集 ④最近習った重要表現特集などが考えられます。1枚のシートは、3~4回(約1週間)で終わるので、生徒にぜひ覚えてほしいと思った表現をすぐに取り上げることができます。また、特に大切な表現や定着が難しい表現はくり返し取り上げることもできます。重要な表現ほど、シートの最初の方に配置すると、多くの生徒が毎回その表現を口にするようになります。

3. 評価

活動の様子や提出されたシート(3~4回の活動を続けてきたもの)を評価の対象にできます。与えられた文を全て暗唱できるようになったか、また毎回決めた自分の目標を達成できているかを評価してもよいと思います(例参照)。

数名にクラス全体の前で暗唱活動をさせたり、ペア活動中の生徒の間違いを紹介したりして、問

違いやすい発音やイントネーションなどを全員で見直す機会としてもよいでしょう。ときどき、一人ひとりの面接による評価を実施すれば、理解の誤りもすぐに指摘できます。

4. 書く活動へ

暗唱ができれば、その中からいくつかの文を取り上げ、「書く」ことをさせるのも一案です。例のように、ワークシートの1~3回目を暗唱とし、4回目を書くことにしてもよいでしょう。定期テストや授業中の小テストとして、暗唱した表現をもとにした書く問題を出題し、評価するのもよい方法だと思います。

暗唱活動前や夏休み前に、これから取り上げる表現(100文や200文)をまとめて示しておく、「大きな目標に向かってがんばろう」という気持ちを起こさせることができますし、表現集として携帯し、いつでも見られるようにすることもできます。暗唱活動は授業で進めていきますが、あらかじめ自主的に準備をさせることにもなります。暗唱や書く練習をした文の数だけ色を塗っていく達成表や世界地図を一緒に渡します。

5. 話す活動へ(「クイックQ&A」の利用)

上で述べたのと同じ方法で、教科書*Sunshine English Course*(開隆堂)の1,2年生用の巻末にある「クイックQ&A」の形式を利用します。ペアのQ&A活動です。ワークシートに書かれた質問を一方の生徒が読み上げ、もう一方の生徒がワークシートを見ずに即座に答えていき、正しく答えられれば、チェック欄に印を付けていきます(例参照)。“Who's your favorite singer?”など、自分のことを答える質問を与えれば、「話す」ことに少しずつ近づけていくことができます。この活動では質問する生徒も文がしっかり読め、正しく答えられているかどうかを判断できるようにがんばらなければいけません(必要に応じてワークシート裏面を発音のヒントや読み方付きにしてもよいでしょう)。

「クイックQ&A」は一問一答形式ですが、さらに話す活動に近づけていく方法があります。質問の一つを会話の最初の文として、ペアで即興的に会話を続ける活動です。たとえば、質問が“Who's

your favorite singer?”であれば、お互いが好きな歌手の紹介や好きな理由、持っているCDの数へと話題を広げていくわけです。1~2分の時間を与え(30秒くらいから始めて次第に長くしていくのも一案です)、ペアで一つの話題を沈黙することなく、できるだけ長く話し続ける活動で、最初の話題が続けられなくなれば、“By the way,”と言って、次の質問に移るようにします。ペアを替えて同じ話題で2回会話を続けると、2回目は慣れもありますし、友だちが使った表現のよかった点をまねることができ、効果的です。活動後、数ペアにクラス全体の前で発表させたり、代表生徒に教師またはALTと発表させたりすれば、全員で誤りを共有できるだけでなく、有用な表現を友だちや教師から学ぶよい機会ともなります。その日の話題(最初の文)と友だちから学んだ有用な表現を数回分書き込める表を渡します。

「クイックQ&A」とは別に、これから取り組む教科書の導入になるような話題や、身近なものから次第に広い世界へと広げるようにして、計画的に話題を提供していくのもよいでしょう。

6. 最後に

毎授業のこのような活動は授業時間を奪ってしまうように見えますが、生徒は毎回くり返すことによって既習事項を思い出すことができ、それぞれの学力を自分のペースで伸ばせる可能性を持っていると思います。また、その活動自体をコミュニケーション活動へと発展させていくことができます。

3年生での復習として書きましたが、1,2年次から長く継続する活動として計画するのもよいでしょう。本校では、1年次に“I like ~”の文を30秒間で何個言えるかといった活動から始め、3年生での即興的な会話を目指して、少しずつ発展的に実践してきました。各学年に合わせて、いつでも始められる活動として、授業の最初の数分を使った活動をお勧めします。

ワークシート例 *数字にのっている文は4回目に書き取ります。

質問 (Questions)	英語 (English)	①	②	③	④
① 私がそんなに早く起きるのは嫌いです。遅い/私は/起きることは/そんなと早く	It's hard for me to get up so early.				
② どのくらい滞在されますか。1週間です。 *詳細を覚えて置きましょう!	How long are you going to stay? For one week.				
③ How did you come to school today?	(I came here) by bike. / I walked here.				
Total					

*活動の前に今日の目標点数を書きましょう。



私の授業実践報告

栃木県足利市立協和中学校教諭 飯塚 淳



1. はじめに

私の心がけていること～目指す英語教師像～

- ・外国の人々と仲よくし、世界平和の礎を担う生徒を育てたい。
- ・授業はできるだけ英語で行いたい。
- ・英語(外国の文化)を学ぶことは楽しいと生徒に思わせたい。
- ・私自身が英語を学んでいる姿勢(英検にチャレンジ、外国旅行、ホームステイ、ALTとの楽しい会話等)を通して、生徒に刺激を与えたい。

2. 自主教材を使用した授業の実践

対象 中学3年生(35名)選択授業

- ねらい
- 1.こちらから一方的に教えない。辞書や質問等で自力で考えさせる。
 - 2.授業の最後に補足説明をし、英語(アメリカの文化)に興味を持たせる。

自主教材の例

At McDonald's in the USA

A Japanese teacher visited the USA to study English. One day, he entered McDonald's in San Diego with some other teachers. When it was his turn, he said, "Chicken nugget, *kyuu*-piece, please." But the cashier didn't understand his English. He asked again, "Chicken nugget" *kyuu*-piece, please!" The cashier still didn't understand him. So he pointed at the picture of the chicken nuggets and said, "Over there! That one, please!" The cashier just said, "Umm."

Another teacher behind began to laugh and said, "*Sensei*, *kyuu* is Japanese." So this time the Japanese teacher said clearly, "Chicken nugget, nine pieces, please!"

Finally, he got his chicken nuggets.

この教材は、筆者が夏休みを利用して約3週間アメリカ・サンディエゴ州立大学の英語教員夏

期講座に参加したときの実体験をもとにしています。ある日、筆者は講座に参加している別の先生方と昼食を食べに行きました。ここでの登場人物“a Japanese teacher”は筆者です。

このように、自分が実際に体験したことを教材にして授業をすると、英語や外国の文化に興味・関心を持たせ、生徒の学習意欲を向上させることにつながります。これからときどき、こういった自主教材で授業をし、生徒と共に英語を勉強し続けていきたいと思っています。

3. おわりに

この他にも、小・中学生のホームステイプログラムの引率者としてオーストラリアのブリスベンに行ったときの体験を教材にしたことがあります。そのとき、筆者は引率した生徒のホストマザーとの電話でのやりとりの中で初めて“chicken pox”(水ぼうそう)という言葉に出会いました。筆者は最初、“chicken pork”という名前の病気だと思込んでいたのですが、実際は“chicken pox”でした。この教材を使用した授業の後、ある生徒が「先生、英語の授業の内容は忘れても“chicken pox”の言葉は絶対忘れませんよ」と言ってくれたことが忘れられません。言葉とは本当におもしろいものです。

しかしその一方で、1992年、アメリカで日本人留学生がハロウィーンの際に、“freeze”という言葉が理解できなかった結果(あるいは聞き取れなかったのかもしれませんが)、射殺されるという痛ましい事件がありました。この事例などは生命にかかわるもので、英語を学ぶ者の教訓にしたいものです。

最後になりますが、『「知識を詰め込むよりも好奇心に火を灯せ」～好奇心に火を灯すのが「最高の先生」』という秋山仁先生(東海大学教育開発研究所教授)の言葉で本稿を締めくくります。



大切にしたい音声指導

前 長崎県長崎市立滑石中学校教頭 森 浩司



1. はじめに

かつて英語の授業において、音声が決して重視されていない中であって、生徒に指導すべきは米語か英語か、標準的な発音とはどちらを指すのかといったことがしばしば議論になっていた。

音声によるコミュニケーション能力の育成が大きく取り上げられている現在、4技能のバランスに配慮しながらも、授業における会話やスピーチ等の活動場面は、以前と比較にならないほど増えた。その一方で、教師の音声そのものへのこだわりは、むしろなくなってきたように思えてならない。

2. 授業の現状と課題

英語の授業が様変わりしてきたことは、他教科の先生方や保護者の皆さんが研究授業や授業参観後に語る感想からも感じ取ることができる。

「自分たちが学生の頃と全く違いますね。」「楽しそう。」「こんな授業を受けていたら、私も少しは話せるようになったかもしれない。」「また、「教師やALTが話す英語を子どもたちはどれくらい理解できているの?」といった疑問の声は、それだけ授業で英語が使われている証と言える。

私たち英語科教師は、ペアでの対話活動、教室を自由に動き回ってのインタビュー、タスクやゲーム的な要素を含んだ情報伝達等、コミュニケーション重視・音声重視の観点から、言語活動の工夫・改善を重ねてきたわけである。

しかしながら、生徒たちの発する英語が、もっと大きさに言えば、学校を卒業した日本人の英語が流暢に(英語らしく)なったかということ、答えはNOである。多くがカタカナ英語、リズム感のない英語の域を脱していない。授業を参観した他教科の教師や保護者から「みんな、英語がうまいですね」といった感想は聞かれないのである。

3. 音声指導の限界と可能性

英語活動に長年取り組んできた小学校の授業を参観させていただいたことがある。子どもたちが歌やチャンツで発する英語にたいへんなショック

を受けた。発音の響きが心地よく、教室中に英語の香りがするのである。担当の先生は英語の専門家ではない。特別な指導を行っているわけでもない。子どもたちが、CDから流れる英語を聞いて模倣しているだけなのに…。

中学校において、たとえば「lとrの違い」を全ての生徒に身に付けさせることの限界を感じていた私は、音声は教わって身に付けるのではなく、聞いて慣れるものと、改めて思い知らされた。

日常、英語の音声が自然と耳に入ってくるわけではない日本において、聴覚や発声器官がまだやわらかい小学生のうちに英語に触れさせる。新しい学習指導要領において、小学校の教育課程に外国語活動が明確に位置付けられたことの意義は大きい。これを受けて、我々中学校英語教師の新たな可能性への挑戦がこれから始まる。そう思いたい。

4. 大切にしたい「強勢」の指導

音声指導に関して、私がこれまでに、そしてこれからも大切にしたいと考えていることは「強勢」である。発音にはある程度目をつぶらないと授業が進まない。こだわり過ぎると生徒は自信をなくして話さなくなる。しかし「強勢」は、たとえば、声の小さい生徒にも「ここだけはしっかり聞こえるように出すんだよ」と指導できる。

そもそも文全体(個々の単語)をまじめに発音しようとするから、英語らしくならない。「強勢」からリズムが生まれ、そのリズムを保つために自然と「語と語の連結による音変化」が生じる。日本人が発する英語の音声は英語らしくなるためのポイントは「強勢」にあり。そう信じている。

5. おわりに

米語か英語かの議論はもはや必要ないにしても、音声へのこだわりはこれからも大切にしたい。日本人の英語に対する苦手意識を克服する上で、避けては通れないことを忘れてはならない。

第56回 中村英語教育賞入選論文発表

第1位：該当者なし

第2位：「エンジョイリスニング」の試み

分散型リスニング学習が音声の生成に及ぼす効果について

A Study of the Link between Perception and Production

東京都立橋高等学校 佐藤 真理子

A Study of Face Validity in a High School English Grammar Test:
Inter-Personal Authenticity Made by Test-Takers

東京都立三田高等学校 山下 次郎

第3位：該当者なし

◆ 審査員 ◆

佐野 正之(審査委員長・横浜国立大学名誉教授)

和田 稔(同副委員長・明海大学名誉教授)

松本 青也(愛知淑徳大学教授)

山岡俊比古(兵庫教育大学教授)

萬谷 隆一(北海道教育大学教授)

論文審査にあたって

審査委員長 佐野 正之

今回で実に56回を数える、全国的に知名度の高い伝統ある「中村英語教育賞」に、合わせて3件の労作が寄せられ、審査員一同非常に嬉しく審査にあたることができましたことをご報告し、厚くお礼申し上げます。

自由題を含めて4種類の課題に対して、高等学校教諭3名のご応募をいただきました。どの論文も力作揃いで、審査は難航いたしました。最終的には、上位2点を選出することができました。

審査にあたりましては、5名の審査員が慎重に審査し、その結果を踏まえて総合的な観点から委員長と副委員長との間で最終審査を行いました。その結果、上記2点の入選作を決定いたしました。審査基準につきましては、従来からの5つの観点、独創性・発想力、内容の充実度、構成力、表現力、応用性・実用性から審査を行いました。

入選作の論文紹介・講評などについては次号に掲載いたします。ご期待ください。

英語教師の裏ワザ

新学期だからできること、 新学期にしかできないこと

北海道洞爺湖町立洞爺湖温泉中学校教諭 大塚 謙二

新学期を迎え、教師も生徒もリフレッシュし、新たな気持ちでがんばることができる1学期。昨年の失敗を分析し、指導力向上に役立てるべき時期でもある。失敗は成功のもと。そんなときの裏ワザは、基本に戻るのだ。奇をてらった導入法もゲームも、授業を華やかにはするが、どんな力がつく活動なのだろうか。授業を楽しくした後は、必ず英語を使う楽しさを感じさせ、力のつく活動が必要である。授業の活動全てには目的があるはず。そして、その目的の先にはどんな英語力がつくのかを見極めて活動していかなければならない。

①Warm-Up活動の充実が生徒を生き生きさせる!

授業の最初をどのように組み立てるかによって授業の流れや生徒の様子は随分変化するものだ。前時の文法を使った発話活動や、過去に学習した事項を使ったコミュニケーションな10~15分間の活動で力をつけてよい流れを作ると、授業後半の集中力も増す。

②授業が停滞するときの特効薬：ペア活動

授業が停滞する理由には、気温が高い/1時間目と5時間目/行事で疲れている/どんよりした天気、などがある。教師はこれらをコントロールできないので、授業が停滞しても自分を責めて悪循環に陥ってはいけない。

しかし、コントロール可能な授業の停滞理由には、教師の説明や一つの活動が長い/学習内容が生徒のレベルに対し、高すぎたり低すぎたりして合っていない/授業に緊張感、テンポ、楽しさがない、などがある。この部分を解決してくれるのがペア活動である。Warm-Up活動に取り入れると基礎的な学習だけではなく、前時の発展的な活動もできる。

③ペア活動の難易度調整：レベルは自己決定

2, 3年生なら、この時期に疑問詞の一問一答をペアで行うと、今後の授業やテストの英問英答で絶大なる効果を発揮する。取り組みやすいのですぐにできて、生徒が活動的になる。方法はペアでお互いの疑問詞プリントを交換して、1人が解

答者、もう1人がチェック係となり既習事項を即座に答える一般的な形式である。なぜこれがよいのかと言うと、全員でくり返し活動できる/ペアなので集中する/即座に答えなければ正解としないので、知識が4技能全てで素早く使える状態になる/覚えた量がわかるので自信がつくからだ。

*Q&A方式【チェック係：「ホワットの意味は？」→解答者：「何!」のような音声のみの簡単なQ&A活動。

*読み上げ方式【解答者：リストの英単語を上から順番に発音し、意味を言う(例：「1番ホワット、何!」)→チェック係：その解答を確認し、正解の場合チェックする】こちらは文字情報を伴うので前者よりも難易度は高まるし、同じ時間でQ&A方式よりも多くできる。1年生なら教科書本文をどちらかの方式で覚えさせるとよい。もちろん、英→日よりも日→英の方が難易度が高くなる。また、解答時間を3秒以内とする3秒ルールや1秒ルールなどを自己決定させると集中して取り組める。1人あたり2分半の合計5分、5日間程度くり返すだけで十分効果が現れてくるので、ぜひトライしてほしい。

④ファイルを持たせて活動プリントをなくさせない

せっかくの活動もプリントを忘れてくる生徒がいるとがっかりさせられてしまう。しかし、安価なファイルを英語授業専用で持たせると忘れ物が減り、多様な活動ができる。語彙、教科書の基本文、日常会話のQ&Aなどのペア活動プリントを用意すると、くり返し練習ができ、力がついてくる。

⑤人間関係づくりは今しかできない最重要課題

実は最高の裏ワザは、生徒との信頼関係構築である。単なるお友達になるのではなく、よく一緒に遊び、言葉づかいや目上の人との接し方をきちんと教え、ダメなことはダメと伝え、よかったらほめてあげ、社会に出てからも立派にやっつけられる生徒に育てることが大切だ。

各種活動プリントのダウンロードは <http://ok.ko.kg> をご活用ください。

フィンランドの教育で思うこと

OECD生徒の学習到達度調査(Programme for International Student Assessment, PISA)の第3回(2006年)の調査結果が2007年の年末に発表された。2003年の調査に引き続き、フィンランドは上位の成績を保っていた。いったいどのような教育をしているのだろうと思い、最近フィンランドの教育関係の本を読んだ。教育哲学や社会や文化があまりに日本とかけ離れていて理解しにくい点もあったが、知らない世界の話を知る喜びもあって、わくわくする気持ちで読み進めた。

1冊目は『競争やめたら学力世界一』という本である。どのページにもフィンランドの学校の様子とその背後にある教育観が書かれており、ハリー・ポッターを読むように、先を読みたいという気持ちで一気に読んだ。たとえば、「教師たちは近くにある学校にほとんど定年まで勤めるので、子供たちの学力形成や人格形成を長期的に見ることができる」(p.138)とある。著者は、学校は地域の子どもたちが育てられる「大きな家」のようなものと表現している。私は東京で子ども時代を過ごしたが、その頃は学校を含めた地域全体にファミリーのような感覚があった。学校の運動会その他に地域の運動会や盆踊りなどの行事も学校で行われ、地域が「大きな家」のような存在だった。今は様子が変わったと思う。フィンランドの教育を知り、日本も昔は助け合いの精神を育む教育が地域で行われていたのだと振り返った。

この本で一番驚いたのは、「習熟度別編成は長期的に見て『できる子』にはよい影響を与えず、『できない子』にとっては何らプラスにならない」として、フィンランドでは1980年代に放棄されたということだ(p.76)。学校ごとに学力のレベルが分かれていないので、学校間格差はほとんどないが、学校内格差は大きいわけだ。しかし、1クラス24名以下で、外国語はその半分の人数なので、生徒の学力が違ってても、同じことを教えながら生徒の個別ニーズに対応した教育を目指すことができる。

つまり、少人数クラスにすることによって、チャンスに平等に与え、生徒の学習意欲や能力に合わせて授業中に個別に対応することができるわけだ。私には、これは理想の教育に見える。チャンスは平等なのだから、いつでも「そうしよう」と思ったときに、先生の個別対応により、高度な勉強に進んでいける。私の学部では、英語の4技能のクラスで習熟度別クラス編成にしている。そうすることで、学力の違う学生に細かく対応している気がしていた。学生はレベルが同じだと似たような質問をしてくるので、教えやすいとさえ思っていた。しかしこれは、一斉授業で教えやすいだけで、授業中に生徒の個別ニーズに対応しているわけではない。習熟度別クラスでも、個別対応を心掛けたいと思った。

もう1冊は『フィンランド国語教科書 小学4年生』である。フィンランドの国語の教科書では、「あなたは どう思いますか?」、「それはなぜですか?」というような質問があり、このような教え方を英語教育でも取り入れていくとよいと思った。これは、教科書ライターの仕事も大きい。普段の授業で、生徒に考えさせたり、自分の意見を他人にわかるように理由をつけて説明させたりすることが大事だと思う。こうしたことは国語教育はもちろん、英語教育でも教えていかないといけないと思う。

(東京国際大学准教授 松林 世志子)

■参考文献

福田誠治(2006)『競争やめたら学力世界一』朝日新聞出版
メルヴィ・バレ他著、北川達夫他訳(2005)『フィンランド・メソッド 5つの基本が学べる フィンランド国語教科書 小学4年生』経済界

投稿を歓迎します

英語教育に関する問題提起、実践報告、研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが、本誌は今後、9月、2009年1月、3月、5月にそれぞれ発行の予定です。原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

- ① 22字詰×72行以内(本文分量)
- ② 二重投稿はご遠慮ください。
- ③ 採用分には薄謝を進呈いたします。